

## 「課題解決」か「主体形成」か

長岡技術科学大学 教授  
上村靖司

### 1. 「帰ろう山古志」からアルパカ村へ

「中越地震で有名になった山古志」だが、中学生以下の世代にとっては、「アルパカのいる山古志」という方が、しっくり来るのではないだろうか。

2004年に中越地震を経験し、その復興計画が県と被災市町村でそれぞれ作られたが、どこにも「アルパカ」とは書かれていない。しかし、アルパカ村として交流人口を急増させた背景に地震は強く影響している。震災の惨状を見た米国の牧場主からたまたま寄贈されたアルパカだが、闘牛という伝統文化の土台があるため飼育に問題はなく、震災で人口流出と高齢化が加速した地域の復興の起爆剤となりうると直感した地域リーダーが、そこにはいた。

計画され予定されている通りの結果を Output というのに対し、必ずしも想定されていなかった結果を Outcome という。アルパカはまさに Outcome の典型だ。偶然・幸運と言ってしまえばそれまでだが、たまたまの機会を掴み取った素地があってこそその Outcome だったのだと思う。中越地震被災地を見ると、アルパカに限らず Outcome に満ち溢れていることに気付かされる。

もともとが過疎化・高齢化の進展する山間豪雪地域。「帰ろう山古志」の掛け声は皆に浸透し、その雰囲気もできあがっていたはずだった。しかし、やはり人口流出のトレンドには抗いきれず、震災が住民の転出を加速させ、震災から10年余を

経て人口は半減した。すなわち過疎化・高齢化という復興計画で設定した課題の解決には成功していないし、見ようによっては明らかな失敗にも見える。ならば復興は失敗だったと断じて良いのか。

住民が帰れる生活基盤が復旧し、3年余の避難生活から帰還した住民たちに対し、地域振興のためのソフト事業も多数展開された。その結果、農家レストランや民宿が新たに生まれ、交流人口は2桁増えた。周回遅れでできたメモリアル施設（山古志復興交流館「おらたる」）は、他施設を一気に追い抜く勢いで来館者数を伸ばし続けている。住んでいる住民たちは「復興は成し遂げた」と胸を張って答えるし、事実、残っている人々は震災前とは比べ物にならないくらい積極的に地域おこし活動に取り組んでいる。

### 2. 「課題解決」と「主体形成」という2つのアプローチ

災害の被災地に限らず、世の中を見渡すと「課題解決」という言葉が飛び交っている。そこにある課題の解決策を探索し実行し克服していく。良い解決策はモデル化され仕組み化されて波及する。実に合理的で効率的で社会の成熟プロセスの重要なアプローチである。これを図示したものが図1左で、「課題解決サイクル」と呼ぶことにする。顕在化した課題(A)を出発点として、その解決策を模索・実行し成果が上がったとする(B)。成功事例ができるとそれがモデルとなり一般化され仕

組み化される(C)。想定外の事象が起きたり、対象が適合しない事例が生じ、有効だった(はずの)対策が陳腐化すると(D)、次なる課題設定がなされる。災害現場においても「災害ボラセン」や「DMAT」などは、現場課題から生まれた仕組みの好例と言えるだろう。こういった仕組みは、特に緊急時や救命救急のステージでは、極めて有効に機能するし、災害を経験するたびにサイクルが回り成熟する。

次に図1右の主体形成サイクルを見ていく。課題の顕在化(A)は同じであるが、次の段階ではまず「課題の自分ごと化(B)」の段階になる。過疎化・高齢化・人口流出による地域の衰退といった、唯一の正解がなくかつ主体が住民である課題に対しては、他人任せでなく自分事であるという認識がない限り、なかなか前には進まない。ある被災者から聞いた「俺達はゆでガエルだった」という言葉からわかるように、震災を経験して「自分ごとスイッチ」がONになったという人も多い。

次なる段階は「課題の本質の理解(C)」である。果たして人口が減ることが本当の問題なのか。衰退していく地域の現実に目をつぶり、問題が起きれば他人任せのように役所に陳情してきた。地域を持続していくんだという覚悟はなく、行動を起こすこともなかった。自分の生まれ育った地域に誇りをもてず、こんな不便な地域に未来はないと自虐的に自らを語っていた。本当の問題はそこに

あったのではないか。(C)の段階を乗り越え、(D)では支援者による支援を得たり、復興基金に代表される予算を活用したり、他地域に学んだりしながら、「地域の存続」という本質的課題に向き合ってきた。その結果として上で述べた地域が活性化した現在に繋がっているのではないか。

ここで注目すべきことは、当初顕在化した課題は「人口の急減」だったはずで、主体形成サイクルが振り出しに戻ってもそれ自体は何一つ解決も改善もされていないという事実である。しかし成果は着実に上がっている。「課題が解決された」でなく「課題に向き合える主体が形成された」というべきだろう。「課題解決サイクル」と「主体形成サイクル」を比較して、一巡りしてもとに戻った時、より好ましい状態を獲得したのはどちらと言えるだろうか。

東日本大震災被災地でも、少し注意して見渡せば、主体形成サイクルの事例はいくらでも見えてくる。例えば釜石の釜援隊の活動記録を見ると、多様な主体がカオスな状況で丁寧な議論を積み重ねながら主体形成サイクルの「自分ごと化」と「本質の理解」にアプローチしている様子が見えてくる。一方で、行政主導のアプローチでは課題解決サイクルのみが遂行されがちである。主体形成サイクルの左半分は、相当な期間、成果が全く見えてこないし、予算付けする根拠も説明しにくい。そして右半分に移っても、当初計画し

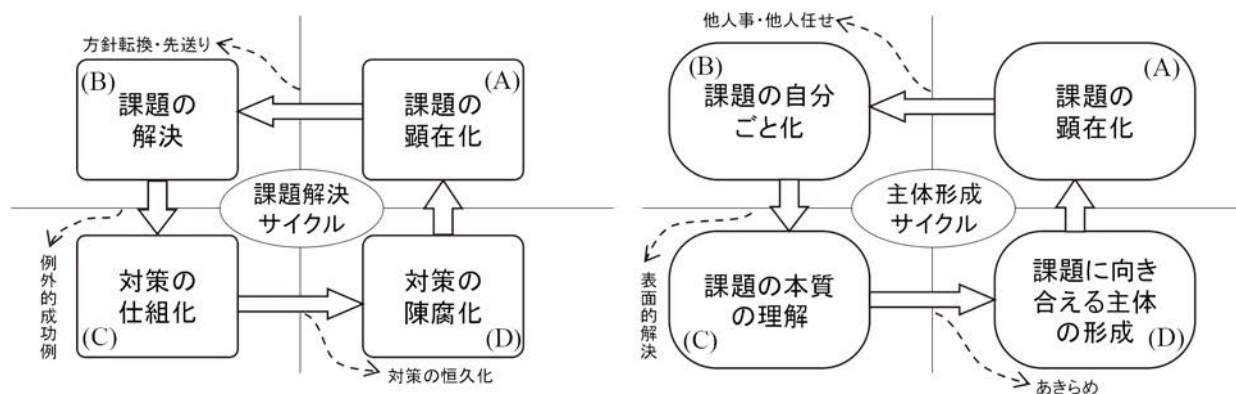


図1 課題解決サイクルと主体形成サイクル

た Output が出てこない可能性もある。Output の無い計画とその遂行は全く評価されないし、予算の無駄遣いと社会から批判を浴びるかもしれない。しかし、Outcome が顕在化して目に見えるようになると（メディアで取り上げられるなど）、後づけで「良い取り組み」として評価されるようになる。

### 3. おわりに

未曾有の大津波を経験し、こんな苦難に二度と遭遇したくないと誰もが考え、堤防の高さが足りなかったという課題を設定し10mを超える要塞を築き上げていく。これは典型的な課題解決型である。しかしその堤防を超える次なる大津波が来たら、同じ苦難どころかもっと大きな苦難に見舞わ

れることは想像に難くない。やはり課題解決だけでは片手落ちちなのではないか。

中越でも、既に中学生は災害を経験していない世代である。「災害に強いまちづくり」と良く言うが、それは高い堤防を作るだけの話ではない。「次なる主体」を育てていく仕組みこそがより本質的な「災害に強いまちづくり」なのではないか。文部科学省も知識偏重の学校教育から、「生きる力」を育む教育へと転換を図ろうとしている。

合理的に効率的に短期的成果を求めがちな社会情勢に強い危惧を抱いている。地域も子どももそう簡単には自立はしないし、育んでいくのには手間も時間もかかる。いや地域の担い手となっていく主体の形成に手間と時間を惜しんではいけないのである。